

新刊紹介

人間の研究。

三 木 清 著

パスカルに於ける
主として Blaise Pascal, Pansoos. の研究である。人間をその對象とし、しかもそれをアントロポロジー(存在論としての)として解釋しやうとしたことに於いて殊に興味深いものがある。

パスカルの思想の内には烙印的に測り難き無限への怖れが支配してゐる。それに對して私達の立場が種々異なることによつて種々なる解釋が可能であるであらう。著者はそれに對して解釋學—Hermeneutik—の立場をもつて、即經驗を概念に於いて、概念を経験に於いて理解する方針を取つたのである。

それが正しきにせよ、又誤れるにせよ、今哲學の一隅に於いて純粹にすること—reinen—に疲れ始めてゐる。事柄そのものを訊ねずして却つて事柄の議論を訊ねることに飽き始めてゐる。それは深遠ではある、しかし深遠なるの故に無用ではないか疑ひ始めてゐる。そして概念より經驗にのみ向ふのではなくして、むしろ事柄及其の *umstände* に於ける關係に於いて具體的にその内的組織を知らうと試み始めてゐる。テイルタイ、シライエルマツヘル、或はアリストテレスまでかゝる方法をもつて廻らんとする暗い流れ。あはたゞしきまでに人の注意を集めてゐる現象學及其の周圍の人の動き、更にむしろ獨逸のもつてゐる所の、いかに

直視的であらうとしてみてもまだ概念的であるところの或時きを逃れてむしろ佛蘭西へ、と云つた如き思惟の氣輕さへの誘惑。かくの如きものが日本の學界にも一面を覆ふた客人の如く訪れてゐる。私達はこの未知なる客の贈物としてこの書を持つてであらう。

パスカルに於いて、無限に比しては虚無であり、虚無に比しては全體である所の中間者—*milieu*—としての人間そのもつ不安定—*incertain*—が魂の具體的形式であつた。それが倦怠の源であり、死への怖れ、宗教的不安、愛の意味となり、更に人間性のもつ悲惨な偉大の原型と成る。この中間の意味をテイアレクテイシユに解釋することによつて、パスカルの魂の内的構造の秘密を啓く鍵を握らん著者は試みる。

先づ人間の分析の上に於いて魂の不安定、その否定としての慰戲—*divertissement*—更にその綜合としての意識—*Pensée*—の三者をテイアレクテイシユなる關係を持たしめて、人間が人間を限りなく超へる契機と爲さしめる。人間はひさつた虚、自然のうち最も脆きものに過ぎない。しかし彼は考へる虚—*le vuide Pensant*—である。彼を潰すためには全體の宇宙が武装するを要しない。ひさつたの蒸氣、ひさつたの水滴も彼を殺すには十分である。然しながら、宇宙が彼を潰すやうな場合にも、人間は彼を殺すところのものよりもなほ遙かに貴いであらう。何故なら彼は彼が死ぬることとして宇宙の彼にまさつて勝れてゐることを識つてなり、これに反して宇宙はそれについては何事も知らぬからである。

この合理化されたる不安定即本來の不安、或は宗教的不安—*inquiétude religieuse*—を單なる論理的懷疑—*scepticisme*—より區別す

ることで著者はパスカルの賭をプートルーの解釋にまかせて置かない。喜悅、喜悅、喜悅の落涙に浸るあらゆる基督者のうちの第一人者としての彼を浮彫づけんとする。單なる理性は彼に取つて幾何學的なる心—*esprit geometrique*—である。心臓は理性の知らぬ彼の論理をもつてゐる、即それは繊細の心—*esprit de finesse*—である。この二つの智慧のデアレクテイクが愛の情念に於いては愛の専政と秩序とその動的性に於いて關係づけられ神の愛の象徴にまで高められる。

象徴とはパスカルに於いては非連續的なる次元的異質性に於ける心情—*Oeuvre*—のもつ連續である。この問題が第四篇三つの秩序以下に於いて論ぜられる。

人間は三つの秩序をもつ、即身體 (*corps*)、精神 (*esprit*)、慈悲 (*charité*) がそれである。精神に對する身體の無限の距離は、慈悲に對する精神の一層かぎりなく無限なる距離をかたどる。一つの秩序は他の秩序に對して異質的であり超越的である。ここでは單に「此れか—彼れか」の最後決定的なる態度、自己の全體をもつてする飛躍が意味をもつのみである。それは一つの賭であり、一つの悲劇である、生が一層高い秩序に達するその飛躍は一つの轉換である、この轉換を規定するものが自覺である。人間はかよはき蕪であるとともに又考へる蕪である。空間によつて宇宙は私達を恰もひざつこの點の如く含むと同時に、意識によつて私達は宇宙を含む。人間の偉大さは彼が自己を憐れなものとして自覺するところの偉大さである。

この偉大と慈悲のデアレクテイクが分離されて綜合せられざる場合私達はエビクテートの傲慢と、モンターニユの怠惰を見出す。ひざつこの他の一層高い光によつて—*par une autre lumière supérieure*—それは結合せられる。それは心情による象徴—*figuralité*、*figure*—によるのである。幸福に對する限りなき渴望とそれを獲得するに由もなき汚されたる人間の歴史即「原罪」—*peché originel*—の意味はそこにある。偉大から放たれた悲惨即廢王の悲しみは彼が高所より墮ちただけ一層慘めである。この二つの兩立しがたき矛盾を解くものは十字架の死に至るまで辱められたる神、死によつて死に打勝つ救世主、神人としての贖主としての二つの性質、二つの生、人間の本性の二つの状態にある。世界はエス・キリストによつて、エス・キリストのために、そして墮落と彼の贖ひとについて人間を救へるためにのほか存続しないのであるから、凡てはそこではこの二つの眞理の證據を顯はにする。エス・キリストに於いて凡ての矛盾は具體的なる意味に於いて調和される。矛盾の綜合のデアレクテイクはかくの如き唯心情によつて、即深い象徴によつてのみ理解することができらるであらう。

パスカルに於ける彼の數學的性格としての冷さとその燃ゆるが如き神への愛とはそれ自身一つのデアレクテイクを爲してゐることも云へやう。この書の興味はパスカルの思想の内面的構造への興味と、更にそれに對する著者の取扱ひ方に持たるべき興味とをわけて持つてゐる。ハイテツカーを創始者とする解釋學、しかも彼が未だそれについての著書をもつてゐない以上、それによつ

て研究されたる本書は日本に於ける彼の方法についての最初の紹介書である誇れもつことができてあらう。

ともあれ、純粹意識、或は純料知覚の如き抽象的概念に疲れ始めた日本の若き思惟者達に贈られたるこの贈物が果して如何に受納れられるかについて私達は深い興味を持たずにはゐられない。

(岩波書店發行、中井正一)